

人物で語る 日本デンマーク

⑮ いわつきのぶじ 岩槻信治Ⅰ

岩槻信治は、愛知県農事試験場の農業技師として生涯を過ごした人物である。その一生の仕事は稲の品種改良で、おいしく作りやすく、収穫量が多い品種の育成と稲作指導に努めて業績をあげた。

岩槻は、一八八九年（明治二十二年）碧海郡長瀬村中園（現岡崎市巾園町）に生まれた。地元的高等小学校を経て、県立農林学校に進み、成績は優秀であったと言われている。そして一九〇六年（明治三十九年）三月、母校の高等小学校の教員となった。

そのころ、明治用水の開通によって、碧海台地の農地化が進行する中、一九〇三年（明治三十六年）に安城村の四本木地内（現安城市明治本町の稲荷社付近）にあった農商務省農事試験場東海支場が統合により廃止された。この時、西春日井郡の清洲にあった県農事試験場の種芸部がこの跡地に移転してきた。この種芸部は、主として米麦、その他の作物の品種改良や病害虫についての研究をしていた。

場長は、山崎延吉が兼務していて、この種芸部を充実させるために愛弟子の岩槻をこの試験場に招いた。一九〇六年（明治三十九年）十二月のことであった。

岩槻が勤めた後には、大正天皇即位があり、悠紀齊田（大嘗祭において、神に供える米を栽培する田をいう）として碧海郡六ツ美村中島が選定された。この齊田事業の主任である山崎延吉のもとで日夜努力を重ねたことから、山崎は「立派な悠紀米を収穫する技術的な仕事は、岩槻が負荷したことである。彼は信念と努力をささげ立派に使命を果たした」と言い、岩槻の力量は、ここで十分発揮されることになった。

その後、一九一三年（大正二年）にこの農事試験場の種芸部は、安城町池浦（境目）へ移り、さらに一九二〇年（大正九年）には、本場が清洲から安城へ移転し、6部門（種芸、園芸、農芸化学、畜産、養蚕、農具）が置かれることになった。岩槻はこの試験場に十八



▲岩槻信治像（池浦町）



▲愛知旭・千本旭（愛知県農業総合試験場安城農業技術センター）

歳から四十二年間勤めた。その間、種芸部一筋で米作りの科学化を図り、稲作栽培技術の向上に努めた。その内容は、米の多収穫、耐病、耐肥であった。岩槻はこの実現に努力を重ね、いもち病、白葉枯病に強くて倒れにくい品種（千本旭・東海千本・豊千本）を作り出すことに成功し、米の増収に貢献した。岩槻は、「愛知旭」、「千本旭」などに続き、「金南風」を作り出した。岩槻の育成したこれらの新品種は各県へ広がり、試験場は「稲の愛知農試」とも言われることになった。

農事試験場では、場長山崎延吉の考えから、試験場での試験研究の成果が実際に生かされるよう、農民に試験場を開放したり、岩槻らが各地に出向いて実地指導をしたりしたこと、試験場の技術が県内に普及した。特に碧海郡地方は地元ということもあって、どこよりも早く優れた稲作技術を身につけたことから、日本デンマーク農業の名声を高める基になった。

文 尾関文啓
おせきふみひろ